ＡＬＳ患者の嘱託殺人事件

安楽死 危うい短絡的議論

鳥取大准教授・安藤泰至さんに聞く

京都の筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）患者の嘱託殺人事件で、ＡＬＳの女性が望んでいたとされる「安楽死」。欧米の一部では法制化もされている死の選択肢をどう考えるべきか。生命倫理が専門の鳥取大准教授、安藤泰至さんに聞いた。

今回の事件について世間の反応はさまざまですが、この女性の死を悲しむ、悼むという最初になされるべきことが、十分なされていない。そんな気がします。そこには多かれ少なかれ、「そういう状態で生きるのはかわいそう」「患者の希望がかなってよかったんじゃないか」といった決めつけがあるのではないでしょうか。

今の日本では、根治療法がない進行性の病を患っている人に対するケアやサポートが、圧倒的に足りていません。本来はまず、医療だけでなく社会として、どんな支援ができるのかを議論することが大事で、安楽死を認めるかどうかはその先の話です。なのに「なぜ死なせてあげないのか」といった話に短絡してしまう今の状況が、私には非常に危うく思えます。

延命治療や介護の現場でも、家族に迷惑を掛けたくないと遠慮して結論を出す人は少なくありませ

あんどう・やすのり　1961年大阪府生まれ。京都大大学院で宗教学を専攻した後、生命倫理、死生学も研究。著書に「安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと」など。

自己決定 見せかけにすぎず

ＡＬＳ患者の嘱託殺人事件でＪＲ京都駅に着いた容疑者の医師を囲む報道陣ら（7月23日）

ん。「本人が決めた」ように見えても、それは「見せかけの自己決定」にすぎません。生きるための自己決定すら保証されていない現状で、死を選ぶことは認めようというのは本末転倒です。

特に日本のように、個人よりも集団や組織の都合が優先され、同調圧力の高い社会では「周りに迷惑を掛けるくらいなら死んだ方がいい」というふうに、本人の意思とは違う方向に追い込まれる危険が大きい。

人が「死にたい」と言うとき、その人が「生きたくない」のだと考えるのは間違いです。人が生きたいというのは「生きていることに意義を見いだして生きたい」ということ。裏を返せば、生きる意義を見いだせない状況が続くと「死にたい」という気持ちが強くなる。逆説的な言い方になりますが、人は「生きたい」から「死にたい」と感じる。生きたいか死にたいかは対極にある意志ではなく、コインの表と裏のように一体化していて、周囲の状況や人々との関係次第で、どちらが出るかは変わるし、いつでもひっくり返るものだと私は思うのです。

病気や障害は、それで失うものがあったとしても、それまでとは違う「生きる意義」に気付くきっかけになることもある。「いのち」の柔軟な可能性を信じることが重要です。